

# 新潟県立図書館所蔵の往来物資料 —出版地域別の観点から—

## Investigation report on "OURAIMONO" documents of Niigata Prefectural Library possession: A study based on the publication place

郡 千寿子\*  
Chizuko KOHRI\*

### 要 旨

新潟県立図書館に所蔵されている近世期版本の往来物資料について、出版地域別に分類整理した調査結果を報告する。総数では、72本の近世期版本の往来物資料が確認され、目的別分類では、教訓科往来9本、社会科往来は所蔵なく、語彙科往来5本、消息科往来16本、地理科往来1本、歴史科往来5本、産業科往来11本、理数科往来18本、女子用往来7本という結果であった。出版地域別の分類では、江戸が37本で最も多く、京都7本、大坂14本、名古屋1本、不明が13本という結果であった。

北前船の寄港地である秋田や酒田の往来物資料の調査結果<sup>1)</sup>では、京都と大坂の出版が多く、関西圏から海路で運ばれたと思われる資料が多数を占めた。一方、今回の調査で、同様の寄港地である新潟においては、江戸出版の資料が多数であったという結果を得た。新潟では、資料が海路よりも陸路で江戸から流入した可能性が高いと考えられた。文化交流の経路という視点から、興味深い示唆を与えてくれる結果であるといえよう。

往来物の分布を通して、地域の教育的背景の格差や文化伝播状況などを解明することを目的としているが、目的別分類の調査結果に加えて、本稿で紹介する出版地域別分類の調査結果は、他地域の状況と比較する上で基盤となる研究成果である。

キーワード：新潟、往来物、言語生活、教育背景、出版文化

### 1. 研究の背景について

近世期以降に出版された往来物資料を通して、実生活にどのようにそれらの文献資料が関わっていたのかの具体像を探ることを目的に研究<sup>2)</sup>をすすめている。往来物は、寺子屋などで手習いのために使用された教科書の類の総称であるが、近世期には様々な種類のものが出版された。従来の往来物研究は、教育史資料という側面からなされてきたが、日本社会の近代化や人間文化形成に果たした役割や影響など、多くの未開拓課題が存在し、新たな視点からの活用が期待されている。

しかし、文献資料の基礎的研究をはじめとして、発

掘も十分にすすんでいない現状にあり、そうした事情を背景に、東北地域の往来物資料についての調査研究<sup>3)</sup>をすすめてきた。現在、東北地域と海域でつながり、近世期に関西とも文化交流など関係が深かったと予測される、北陸地域にも調査対象<sup>4)</sup>を拡げている。地域間格差や文化伝播事情など研究の進展を目指し、新潟地域における、長岡の調査報告<sup>5)</sup>、新潟県立図書館所蔵資料の目的別分類の調査報告<sup>6)</sup>に加えて、本稿では、出版地域に焦点を絞った調査結果を報告する。目的別分類の調査報告で紙幅の関係から、具体的な資料紹介ができなかったため、本稿では一部画像を含め掲載する。

\*弘前大学教育学部国語教育講座

Department of Japanese Language and Literature, Faculty of Education, Hirosaki University

## 2. 調査方法

東北地域における所蔵往来物の調査にならい、原則として、写本は除き、版本に限って成立時期や出版元を確認した。調査対象の資料それぞれについて、目的別と出版地別に分類整理<sup>7)</sup>て、地域ごとの特徴について今後考察検討したいと思うが、写本を除いたのには意味がある。本研究の大きな目的のひとつは、地方における近世期の庶民生活について、出版文化を通して考えてみることである。写本は、その資料の内容を知るには重要な資料であるが、どこでどのような文献が出版され、それがどのような場所で使われてきたか、文化や教育の流通状況<sup>8)</sup> 解明するためには、版本の方がより大きな資料的価値をもつと考えたからである。基本的には、従来の調査手法を踏襲し、調査対象の往来物資料を厳選し、分類整理を試みた。

## 3. 調査結果と資料紹介

『新潟県立新潟図書館所蔵郷土資料解説目録（和装書の部）』および『新潟県立図書館旧館分類図書分類目録19 和装書』『新潟県立図書館所蔵和装書目録（郷土資料を除く）』<sup>9)</sup> 参考にし、調査対象に該当すると思われる近世期の往来物資料を選別した。

総数では、72本の近世期版本の往来物資料が確認された。目的別の分類では、教訓科往来9本、社会科往来は所蔵なし、語彙科往来5本、消息科往来16本、地理科往来1本、歴史科往来5本、産業科往来11本、理科往来18本、女子用往来7本という結果であった。

出版地域別の分類では、江戸が37本で最も多く、京都7本、大坂14本、尾張（名古屋）1本、不明が13本

という結果であった。本稿では、奥書部分の画像などを含め、特徴的な資料を紹介しながら調査結果を報告する。なお出版年が判定できる資料は、書名とともに（ ）で示したが、不明のものは記載していない。

### ①江戸の出版資料について

総数72本のうち、江戸の出版資料は最も多く、37本であり、51%を占めている。

目的別分類における教訓科往来資料は9本で、そのうち『実語教童子教』（1868年）、『実語教童子教』（1816年）、『謹身往来』（1805年）、『世話字往来教草』の4本が江戸の出版である。

社会科往来資料は所蔵がなかったため、調査対象資料はない。

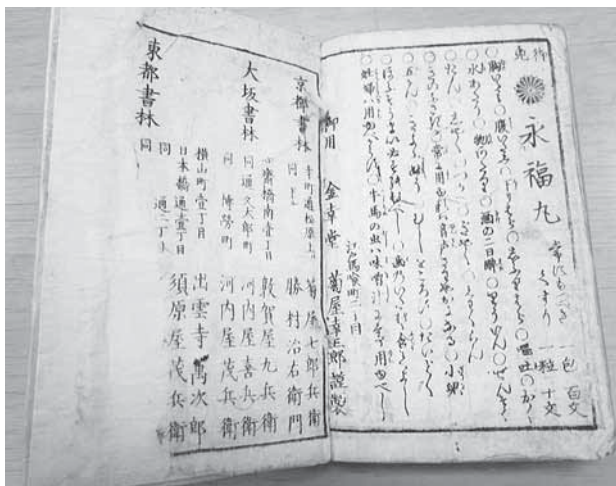
語彙科往来資料は5本で、そのうち『大統歌 上下』（1859年）、『一騎歌尽』（1863年）の2本が江戸の出版である。

消息科往来資料は16本で、そのうち『書礼弁惑集』（1766年）、『永福用文章』（1860年）、『雅俗要文再刻』（1841年）、『天保改正庭訓往来』、『洛陽往来并文章』（1846年）、『菅家文章經典余師』（1839年）の6本が江戸の出版である。

地理科往来資料は1本所蔵が確認できるが、大坂出版の資料のため、江戸の出版はない。

歴史科往来資料は5本で、そのうち『今川帖』（1867年）、『御家古状揃』（1843年）、『御成敗式目』（1830年）の3本が江戸の出版であった。

産業科往来資料は11本で、そのうち『御家商売往来並官名』（1825年）、『商人買物独案内』（1833年）、『番匠往来』（1829年）、『百姓往来』（1771年）、『百姓往来』（1805年）、『商売往来』（1862年）、『匠家故実録』



『永福用文章』（最終丁）



『新刻百姓往来』（表紙裏・1丁表）

(1808年)、『百姓往来(新刻)』(1842年)の7本が江戸の出版である。

理数科往来資料は18本で、そのうち『算法新書』(1830年)、『算法助術附三法浅問抄』、『算法地方指南』(1836年)、『算法地方大成』<sup>10)</sup>(1837年)、『算法地方大成』(1837年)、『和漢曆原考』(1830年)、『算法通書』、『算法天生法指南』(1810年)、『當世改算記』(1847年)、『発微算法演段諺解』(1685年)、『洋算用法』(1857年)の11本が江戸の出版であった。

女性用往来資料は7本で、そのうち『女学則』(1762年)、『女小学宝文庫』、『女小学宝箱』(1842年)、『女中庸宝文庫』の4本が江戸の出版であった。

以上に示したように江戸の出版は、教訓科で4本、語彙科で2本、消息科で6本、歴史科で3本、産業科で7本、理数科で11本、女子用で4本の計37本という結果であった。出版地域別の観点だけでなく、目的別分類の視点も加えてみると、理数科往来資料で江戸の出版の割合が多いという点が指摘できそうである。

江戸で出版された資料について、出版年という視点からもまとめておきたい。出版の年代が確認できない資料が5本であり、確認できる資料は32本である。最も年代の古いものは、理数科往来の1685年出版の『発微算法演段諺解』(1685年)であった。1700年代前半期のものは確認できず、1700年代後半期の資料が、『百姓往来』(1771年)、『書礼弁惑集』(1766年)、『女学則』(1762年)の3本である。

1800年代の前半期の資料が最も多く、『実語教童子教』(1816年)、『謹身往来』(1805年)、『雅俗要文再刻』(1841年)、『洛陽往来并文章』(1846年)、『菅家文章經典余師』(1839年)、『御家古状揃』(1843年)、『御成敗式目』(1830年)、『御家商売往来並官名』(1825

年)、『商売買物独案内』(1833年)、『番匠往来』(1829年)、『百姓往来』(1805年)、『匠家故実録』(1808年)、『百姓往来(新刻)』(1842年)、『算法新書』(1830年)、『算法地方指南』(1836年)、『算法地方大成』(1837年)、『算法地方大成』(1837年)、『和漢曆原考』(1830年)、『算法天生法指南』(1810年)、『當世改算記』(1847年)、『女小学宝箱』(1842年)の21本という結果であった。

残りの7本が1800年代後半期に出版されたものであり、『永福用文章』(1860年)、『大統歌 上下』(1859年)、『一騎歌尽』(1863年)、『今川帖』(1867年)、『商売往来』(1862年)、『洋算用法』(1857年)である。

あくまで新潟県立図書館所蔵の往来物資料という限定的な枠組においてであるが、江戸の出版資料は、1800年代前半期のものが最も多く、この時期に集中しているといえる。出版地域について論じた先行研究<sup>7)</sup>からみても、この調査結果は矛盾しない傾向にあるといえるであろう。

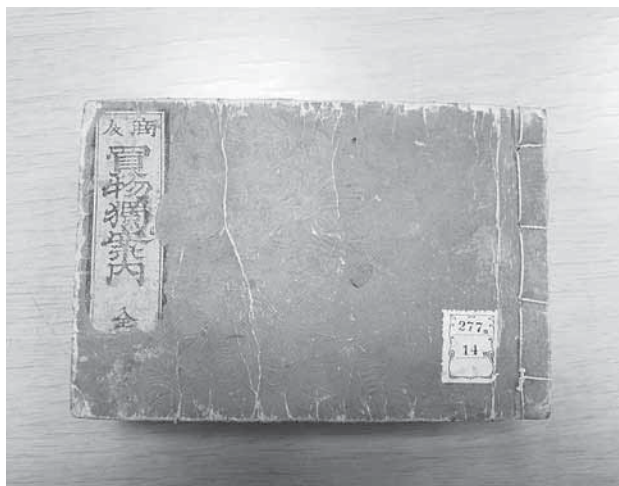
## ②京都の出版資料について

京都は出版発祥の地といえるが、本稿の新潟県立図書館所蔵資料では、江戸や大坂に比して少なく、7本が該当するという結果が得られた。割合でいえば、10%にすぎない。

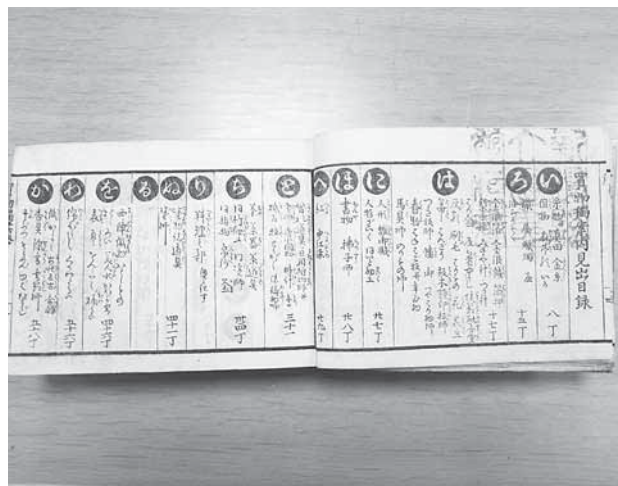
目的別分類における教訓科往来資料は9本で、そのうち『六論衍義大意』(1847年)、『改正新刻実語教童子教』(1861年)、『絵入二十四孝抄』の3本が京都の出版であった。

社会科往来資料は前述のとおり、所蔵がなかったため、調査対象資料はない。

語彙科往来資料は5本で、そのうち『五体名頭字七ついろは』の1本のみが京都の出版である。



『商売買物独案内』(表紙)



『商売買物独案内』(3丁裏4丁表)



消息科往来資料は16本で、そのうち『書翰初学抄』(1684年)の1本のみが京都である。

地理科往来資料は1本所蔵が確認できるが、大坂出版の資料のため、京都の出版はない。

歴史科往来資料は5本で、そのうち京都の出版は見当たらず、0である。

産業科往来資料は11本で、地理科、歴史科同様に京都の出版は全くなく、0である。

理数科往来資料は18本で、そのうち『階梯算法』(1820年)と『暦学法数原』(1787年)の2本が京都の出版であった。

女性用往来資料は7本であるが、京都の出版資料はなく、0である。

以上のように京都の出版は、目的別分類の教訓科往来で3本が最も多く、次いで理数科往来の2本、語彙科と消息科で1本確認できたが、地理科、歴史科、産業科、女子用では他の出版地域の資料はあるものの、京都出版は0という結果が得られた。

新潟においては、江戸出版の資料が圧倒的に多数であり、出版先進地であるはずの京都の資料は7本であり、意外に少ないという興味深い傾向が知られたのであった。

資料数が少ないため、出版年という視点からの整理にはあまり意味がないと思われるが、出版年が確定できる5本についてみれば、『書翰初学抄』(1684年)が最も古く、次いで1700年代後半期の『暦学法数原』(1787年)、そして1800年代前半期の『階梯算法』(1820年)、『六論衍義大意』(1847年)と続く。1800年代後半期では比較的早い成立の『改正新刻実語教童子教』(1861年)があった。京都の出版資料についてみても、1800年代前半期のものが多いといえよう。

### ③大坂の出版資料について

大坂の出版資料は、総数72本のうち14本であった。割合は20%である。

目的別分類における教訓科資料9本のうち、大坂での出版は『小笠原諸礼大全』(1806年)、『孝行往来』(1835年)の2本であった。

社会科往来資料は所蔵がない。語彙科往来資料は5本のうち、『諸家学要世話万字文』(1835年)の1本が大坂出版である。

消息科往来資料16本のうち、『校正新板庭訓往来』(1843年)、『必東和文章』(1796年)、『風月往来』、『庭訓往来』(1770年)、『消息文例 上下』(1805年)の5本が大坂出版であった。

地理科往来資料は1本のみ所蔵が確認されたが、それが大坂出版の『江戸往来』である。

歴史科往来資料は5本で、『頭書訓読古状揃精注鈔』の1本が大坂出版である。

産業科往来資料は11本と多いが、大坂出版は『農家専要増益百姓往来』の1本だけであった。

理数科往来資料も18本と多いが、大坂出版は『算学提要三卷』(1846年)と『和漢算法大成九卷』(1695年)の2本のみであった。

女子用往来資料は7本で、そのうち『孝行往来』(1835年)1本が大坂の出版である。

出版年という視点からの整理してみると、大坂出版資料の14本で、最も古いのは、理数科往来の『和漢算法大成』(1695年)であり、次いで1700年代後半の『庭訓往来』(1770年)、『必東和文章』(1796年)であった。

そして1800年代前半期には、『消息文例 上下』(1805年)、『小笠原諸礼大全』(1806年)、『孝行往来』



『算法通書 上中下』(表紙)



『五体名頭字七ツいろは』(表紙裏・1丁表)

(1835年)、『諸家学要世話万字文』(1835年)、『校正新版庭訓往来』(1843年)、『算学提要三卷』(1846年)、『孝行往来』(1835年)といった7本が確認できた。

つまり、江戸も京都も大阪も、1800年代前半期の資料が最多であった。1600年代の出版資料はそれぞれ1本ずつ確認され、1700年代後半期の資料はいくつか確認されるものの、1700年代前半期出版を確認できる資料がなかったことは興味深い結果であった。

#### ④江戸・京都・大阪以外の地域における出版について

以上まとめてきたように江戸の出版が最も多く、37本であり、次いで大阪の14本、京都の7本と続く。三都以外の地域では、「尾張」が確認された。理数科往来資料のなかの『算法点 指南録』(文政刊)という資料である。

また出版地が確認できない資料も多く、13本は不明という結果であった。

割合で示せば、江戸の出版資料が51%を占め、大阪が20%、京都が10%、尾張が1%で、18%の資料の出版地が未確定で不明ということになるであろう。

#### 4. まとめにかえて

新潟県立図書館に所蔵されている近世期版本の往来物資料について、出版地域別に分類整理した調査結果をまとめると、総数72本のうち、江戸が37本で最も多く、京都7本、大阪14本、尾張(名古屋)1本、不明が13本という結果であった。

出版年代という観点からみると、1800年代前半期に刊行された資料が最多であり、1700年代後半期の資料が続き、1600年代の古い刊行資料も少ないながら確認

できた。1700年代前半期刊行の資料は全く見られなかった。ただし、出版地域や出版年の未確定の資料が13本あることから、ひとつの傾向にすぎないことは注意しておく必要がある。ただ出版地域の偏在については、重要な調査結果を示すことができたといえそうである。

つまり、新潟に所蔵されている近世期版本の往来物資料は、京都・大阪の出版物より、江戸が約半数51%を占めており、江戸の出版物が多かったという点が注目される。

拙稿<sup>1)</sup>で明らかにしてきたように秋田や酒田の往来物資料では、京都と大阪の出版が多く、関西圏から海路で運ばれたと考えられる資料が多数を占めた。一方、本稿で明らかにしたように同様の寄港地である新潟では、資料が海路よりも陸路で江戸から流入した可能性が高いと考えられた。文化交流の経路という視点から、興味深い示唆を与えてくれるものといえよう。

往来物の分布を通して、地域の教育的背景の格差や文化伝播状況などを解明することを目的としているが、目的別分類の調査結果に加えて、出版地域別分類の調査結果では、他地域の状況と比較することで、より鮮明にその地域性を明らかにすることができたのであった。

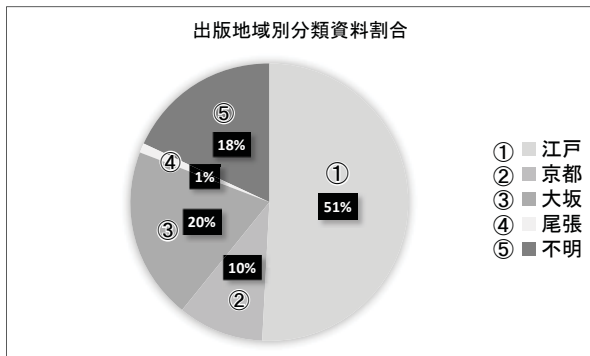
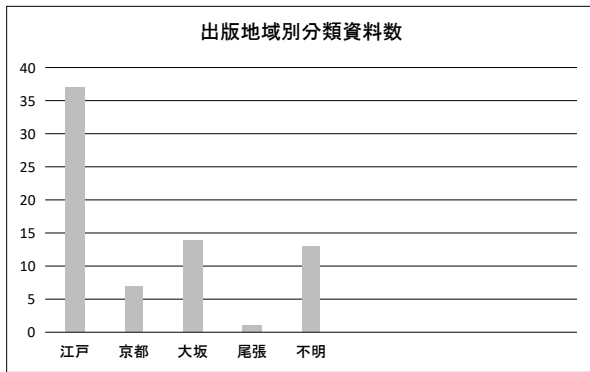


『校正新版庭訓往来』(表紙裏・1丁表)



『風月往来』(表紙裏・1丁表)





## 注

- 1) 拙稿「酒田市立光丘文庫所蔵の往来物資料一目的と出版地からの分類分析一」(『弘前大学教育学部研究紀要』第107号、2012年3月)、拙稿「山形における江戸時代の書籍流通について一往来物資料の出版地域からの検討一」(『弘前大学教育学部研究紀要』第109号、2013年3月)、拙稿「秋田県立図書館所蔵往来物の出版地域に関する一考察一弘前・酒田・山形との比較検討一」(『弘前大学教育学部研究紀要』第111号、2014年3月)等参照。
- 2) 拙稿「弘前市立図書館所蔵「往来物」について一関西文化との関係から一」(『関西文化研究叢書別巻 往来物の研究 第1輯』所収、武庫川女子大学関西文化研究センター、2006年3月)、拙稿「弘前市立図書館蔵『都花月名所』考一近世期の京都観一」(『関西文化研究叢書別巻 往来物の研究 第3輯』所収、武庫川女子大学関西文化研究センター、2007年3月)、拙稿「往来物の「女ことば」について」(『関西文化研究叢書 10巻』所収、武庫川女子大学関西文化研究センター、2008年11月)、拙稿「近世期における「御所ことば」の記載について一東京大学総合図書館蔵「往来物分類集成」からの報告一」(『弘前大学教育学部研究紀要』第104号、2010年10月)、拙稿「国語資料としての『都花月名所』一江戸時代後期における漢字表記と振り仮名一」(『弘前大学教育学部研究紀要』第106号、2011年10月)、拙稿「『南都名所記』についての一考察一山形県立博物館教育資料館所蔵本の資料性一」(『弘前大学教育学部研究紀要』第110号、2013年10月)等参照。
- 3) 拙稿「岩手県立図書館所蔵の往来物について」(『弘前大学教育学部研究紀要』第100号、2008年10月)、拙稿「八戸市立図書館 旧遠山家所蔵の往来物について」(『弘前大学教育学部研究紀要』第102号、2009年10月)、拙稿「秋田県立図書館所蔵の往来物資料について」(『弘前大学教育学部研究紀要』第103号、2010年3月)、拙稿「山形県立博物館教育資料館所蔵の往来物資料一目的別分類からの考察一」(『弘前大学教育学部研究紀要』第108号、2012年10月)等参照。
- 4) 拙稿「富山県立公文書館所蔵の往来物資料について」(『弘前大学教育学部研究紀要』第114号、2015年10月)、拙稿「高岡市立中央図書館所蔵の往来物資料について」(『弘前大学教育学部研究紀要』第116号、2016年3月)参照。
- 5) 拙稿「長岡市立中央図書館文書資料室所蔵の往来物一横山家文書からの報告一」(『弘前大学教育学部研究紀要』第117号、2017年10月)、拙稿「新潟長岡「斯道館資料」の往来物について」(『弘前大学教育学部研究紀要』第118号、2018年3月)参照。
- 6) 拙稿「新潟県立図書館所蔵の往来物資料について一目的別分類の観点から一」(『弘前大学教育学部研究紀要』第120号、2018年10月)参照。
- 7) 分類については、石川松太郎著『往来物の成立と展開』(雄松堂、1988年)、石川松太郎・小泉吉永編著『往来物解題辞典 解題編』(大空社、2001年)、石川松太郎・小泉吉永編著『往来物解題辞典 図版編』(大空社、2001年)を参考とした。
- 8) 長友千代治著『江戸時代の図書流通』(思文閣出版、2002年)、鈴木俊幸著『江戸時代の読書熱』(平凡社、2007年)、市川寛明・石山秀和著『江戸の学び』(河出書房新社、2006年)等参照。鈴木俊幸氏のご研究によれば「寛政期(1789~1801)を境にして、知と情報のありようが大きく変化していくように思われる。」(『江戸時代の読書熱』(平凡社、2007年)17頁参照)という。
- 9) 『新潟県立新潟図書館所蔵郷土資料解説目録(和装書の部)』(新潟県立図書館、1993年)、『新潟県立図書館旧館分類図書分類目録19 和装書』(新潟県立図書館、1992年)、『新潟県立図書館所蔵和装書目録(郷土資料を除く)』(新潟県立図書館、2018年3月)参照。
- 10) 『算法地方大成』は書名が同様であるが、資料番号【3003 601/甲24】は合冊1冊本であり、資料番号【3009 601/甲28】が5巻5冊本である。同じ書名であるが別資料である。

## 【付記】

貴重な文献資料の閲覧や撮影、ならびに掲載許可をいただくなど、研究にご協力とご助力をいただいた、新潟県立図書館の関係者各位に心より感謝申し上げます。

本稿は、科学研究費助成事業 JSPS KAKENHI (基盤研究(C) 課題番号15K02555) の助成を受けた研究成果の一部です。

(2018.12.20 受理)